
どこにでもあって、どこにでも無い話

天海雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どにでもあって、どにでも無い話

【著者名】

Z5755M

【作者名】
天海雨月

【あらすじ】

どにでもあって、どにでも無い話です。

主人公が「コードスリープみたいなことになつて、未来で繰り広げるドタバタみたいな話です。そんな話だつたらいいなあつと思います。

どつかの話に似ているかつて、そんなこと気にしない！

プロローグ 式典 招かれたる夜(前書き)

あくしょん、こんな小説で世の中が変わったらいなあ
orz orz 何これ

プロローグ 式典 招かれた客

「これでよし

「何がこれでよしだ。くそ、離せ」

「大丈夫だつて、父さんを信じな

「てめえ、この状況でどう信じればいいんだ」

「なに、たかが実験台になつてるだけじゃないか」

「何さらつと言つてんだ。実験台？聞いてねえよ。実験は成功だつて聞いたから……」

「あ、ごめん。あれ、嘘

「てめえー」

「大丈夫だつて、この説明書を見る限り、こうすればいいんだから「てめえが、今見てるのつてパラレルワールドに行く少年の漫画だろうが。お前四十になつてもそれか」

「息子よ、何も分かつていなか。お前を別にパラレルワールドに行かそつとは思つていない」

「え、じゃあ何のために」

「コールドスリープが自宅でも可能か、調べてるだけだ

「おいー。なおさらやめる」

「何を言つている。もういい、これで最後じゃないからな。ちゃんと二十五年後に目を覚まさせてあげるから」

「おい、だからちょっと待て」

そんな少年の叫び声も空しく、父さんと呼ばれた人間は何かしらのスイッチを押した。その少年は深い眠りへと誘つた。男は狂氣を上げた。実験は成功したのである。

「やつたー。家庭でもコールドスリープが可能だ。やつほー。二五年後が楽しみだな。俺、老けてるだろ? ハハハハ・・・ハ?」
男は突然慌て始めた。そして、二十五年という数字を注意深く見た。

どつやうり眼鏡を掛けずに押していたらしい。眼鏡をかけてよく見

た。

「一千五百年後? あ、しまつた。数字押し間違えた」

プロローグ 式典 招かれた客（後書き）

はい、ふぞけた内容になりました。

式典（前書き）

あくしょん、こんな自分が投稿してすいませんでした。

式典

「ヤシヤル様、そろそろお時間です」

背の高い付き人がヤシヤルという少女のそばで彼女を見守っていた。彼女は今王位継承を受けることになつていた。先代の王が病により死亡し、彼女が女王として国を治めるのだ。

「コライ、そんなに急かさなくても大丈夫よ。式典までにはまだ時間があるわ」

ヤシヤルと呼ばれた女の子には小さな白い翼が生えていた。大人になると飛べるようになるのだが、十二歳ぐらいだと飛ぶ事も使う事もない。彼女は戦闘妖精ピクシーの一族である。もつとも女だけがピクシー族であって、男はまったく違う種類である。ここ、ハルサメニアでは戴冠式及び式典が開始される。この式典には数多くの王族が来て、新たなる王を閲覧する場所でもあった。

「ヤシヤル様、何事も早くするのが良いのです。式典は神聖なる儀式です。また、お化粧などで時間が遅れたら、クルミ様に叱られますぞ」

「クルミ姉様に叱られるのはよくない。わかつたコライ、御主の言う通りにしよう。で、何から始めたら良いのだ」

「ヤシヤル様、まずは服を正装に着替えて、その後お化粧をするのです。亡き女王が今の姿を見たらさぞかし嘆かれるでしょうに」
彼女はブレンテスという服のままだった。ブレンテスは夜に着る服で寝る時や寛ぐ時に使うのだ。

「しかし、コライ。私はこの正装服が嫌いじや。こんな服では襲われた時、大変じやう」

「ヤシヤル様。警備も万全です。しかも各国の王たちがいる前で襲

われることは無いでしょ。私が暗殺者であったのなら夜か、この場所から移動する時に狙います」

「そうじゃったな。だが、不安での。何か嫌な予感がするのだ」

「ヤシャル様、女王という立場になられるお方が、じやや、だを使わないで欲しいのです。もつと無邪気してくれませんか」

「ユライは厳しいのう。別に良いではないか、こんな語尾いちいち誰が気にする」

「でも、それじゃ、あたしの立場はどうなるの」

そこへヒーテルという服で来た女人人が入ってきた。ヒーテルとは平民が好む服で破れない、縮まない、臭くならないの三つの要素が入っている最高の服なのである。女人用は白とピンクが混じった服で、男人用は青と黒が混じった服で出来ている。

「これは、クルミ様。あなたも早く王族の格好をお願いします」

「でも、あたしは式典にはでないのよ」

「それでもクルミ様は王族の人間です。さあ、王族の服を着て下さい。シランサー様に任せるので、早く仕度して下さいね。シランサー様、では後をお願いします」

厳格な雰囲気をした老婆が入ってきた。彼女はシランサーと呼ばれ、長年この一人の姫に使えてきた従者なのである。

「さあクルミ様、ヤシャル様、仕度をお願いします」

「わかつた、婆や。ところで婆や、この式典に来る王族はわしらの他に誰が来るのじや。ユライは各国と言つておつたが、国自体空中にあるではないか。大丈夫なのか」

「はあ、姫様。一国の主となる人がそのような事を言つてはこの国も大丈夫でしょうか。よいですか、我々戦闘妖精。ピクシー族は知能に長けた一族です。他の者たちと違つて知識だけは上ではならないといけないので」

「わかつてある。だがな、姉上とも昨日話しておつたんじやが、戦闘妖精は我々だけではないじゃろつ。他にもいたが、あと異次元人もくるというではないか」

「その通りで」「ぞ」います。我々戦闘妖精は三つの勢力があります。ピクシー、エルフ、そしてニーファンドーラです。ピクシーはさきほども述べた通りに知識が長けた一族として、どちらかというと戦闘には不向きな一族です。エルフは肉弾戦闘が得意な種族として、まあ、いわゆる知能戦術には欠けている種族です。ただ、私は差別しているのではありませんが、少し騎士であることに誇りを持つている変わった一族とでもいいましようか。そして、ニーファンドーラは魔法に長けた一族です。ピクシーとも比較的に仲がよかつたのですが、その」

シリーンサーはちらりとクルミを見た。

「婆や、その話はあたしがいない時にお願いします」

クルミはツンとした顔で横を向いた。どうやらあまり触れられたくない話らしい。

「そうですね、失礼致しました。さあ、仕度は整いました。そろそろリヴァースに着くところです」

そう言いながら、彼女は礼をして出て行つた。リヴァース別名地獄の入り口とも呼ばれているぐらい危険なところである。ここは危険な人物が多くいて、無法者や賞金首が入つた場合、殺されてしまうことで知られている島である。その町で式典をすることは遙か昔に決められている。いつ始まったかは知らないが、そう誰かが決めたのである。リヴァースの中央にある首都の名前がハルサメニアである。異次元人とはそのまで別次元から来た人たちである。こちらが召還することが不可能で、あちらから神隠しとかいわれる現象でくることが出来る。空中都市エアーリアルは高度を下げて、港に

着いた。もつとも空中都市といつても王宮と森と湖ぐらいしかない。大きさは一千メートル、幅が千メートル、高さが三千メートルとやや大きい空中都市である。元々はフォレスト国の一端であったが、ある日どこかの科学者が空中都市というものを作りたがって、作ってしまった国なのである。港にはたくさんの船が到着していた。空中を飛ぶ船もどこかの科学者が作ったといわれている。

港に着いた頃、ヤシヤルに手を振る人がいた。その子は白髪で耳が上に跳ね上がり、ヘヒーテルを着ていた。十一歳ぐらいの子供である。

「おお、ルイス。来ていたのか」

「まあな。これからは敬語を使わなければならないのか、すまない」「ルイス、別に敬語なんて使わなくてもいい。わしの命令じや、わたしに対して敬語を使うな」

「承知した。ところで、それが戴冠式に使う服なのか。少し恥ずかしいなあ」

「うむ。だが、これはある科学者が発案したものでな。その科学者によれば襲われても簡単に逃げることができるとか言つておつたが、適當であろう。ところで、御主ヘヒーテルのままじゃが、それがエルフの正装なのか」

「そうだ、我々エルフは外見ではなく、内側から判断する種族だ。ダークエルフと違つてな」

ルイスはちらりと横を見た。日焼けした肌と白髪、背中には弓を背負っていた。しかし、ヘヒーテルではなく、もう少し豪華な格好である。

「ほう、あれが噂に聞く、ダークエルフが式典などに着るヘヒーテルデラックスだな。なかなか綺麗ではないか」

「そうかな。男があんなキラキラしたものを着るなんて信じられない」

「しかし、そういう御主こそダークエルフではないのか」

「あいつらとは違う。わしらセイントエルフはダークエルフのよう

に力がないわけではない。戦闘妖精エルフだぞ」

「すまん、すまん。ん?何じゃ」

彼女たちが話しているところから少し離れたところで騒ぎが発生していた。クルミともう一人の女人人が歪み合っていた。その女性は長髪の金髪で服は垂れ下がっていて、何か気品があふれるものだった。

「あら、クルミ。こんなところで会うなんて奇遇ですわね」

「本当にね、ラルス。あなたも王位を逃したのね」

「そんなことないですわよ。あたしはまだ継承権から外れてないはずなのよ。ところであなたはどうやら外れたようですね」

「あらあら、誰かさんのせいでこうなったのはご存知かしら」

「あら、誰かさんは誰でしょうかね」

睨み合い、そして両方とも腕で突つかかった。

「何やつとるのじや、あいつら」

「わからないが、どうやら前の晩餐会の時に何かあったのでは」

「そうじやな。おつとそろそろ時間じや」

ヤシャルは真ん中の道を歩いた。そこだけは深紅の絨毯が敷いてあり、皆脇へと避けた。全てではないが、ほとんどの王族が見えていた。皆この儀式をどれほど待つたのか。先代国王が死んでから国は荒れ果て、ようやく女王が選ばれたのである。ヤシャルが真ん中の道を歩いていると、先ほどクルミと喧嘩していた女性と同じような女性たちが手を上にかざし、何やら綺麗なものを天井に打ち出している。

「ほう、あれが噂に聞くニーファンドーラ特有の極法か。なんと美しいものだ」

ヤシャルは感心しながら中央へと進んだ。彼女がちょうど真ん中にたつと、渋い感じの顔をしたおじいさんが彼女の頭に王冠を載せた。これで彼女は王となつたのである。そして、人々は歓喜した。彼女は手を挙げたら、その声は止んだ。

「我ここに誓う。我国決して無駄な血を流さん、そして他国に大し

ても決して流さん。我ここに誓つ、新生なる國に栄光があることに人々は彼女にひざまずくように座つた。これが戴冠式の習わしなのである。そして、彼女はコライから赤い飲み物を受け取つた。これを飲み干す事でこの戴冠式は終わる。彼女が飲もうとした、その瞬間ナイフが彼女のグラスに当り、床に飛び散つた。気がつくと、そこには黒いマントを被つた人がいるではないか。しかもその人が言った。

「飲むな。死ぬぞ」

式典（後書き）

あくしょん、こんな、こんな小説

招かれた時（前書き）

へつる、へべる、へべるー

招かざる客

ヤシャルが絨毯の上を歩いていたとき、ちょうど真上に六人の黒いマントを着た奴らがいた。それぞれ背格好も違つた。天井から一人の若い男の声がした。その男はフードで顔が見れない。

「ほら、来たぞ。あれが今回のターゲットだ」

もう一人の黒いフードに語りかけた。

「あの子が。なんでバーチガールの服なんて着てるんだ」

「あれが、あいつらの国では正装なんだ」

「趣味悪いな」

「そんなことお前には関係ない。それよりも彼女が赤い飲み物を飲んだ時に狙え。俺たちはここでお前を見ているからな。大丈夫だ、失敗などない。あの、背の高い奴がいるだろ」

「ああ、なんかいるな」

「あいつはおれたちの仲間だ。この計画のためにあのでしゃばりに付き従つた。失敗は許されない、わかるな」

「耳にタコができるほど聞いたよ。失敗はしない」

「よし、いいか」

ヤシャルがグラスを取り、飲み干そうとした。ところが、さつき命令された男が突然ナイフを取り出し、投げたのである。

「貴様、契約違反だぞ、おい、今出て行つたら殺されるぞ」

「ほつとけ、どうせこれが終わつたら殺されるんだ」

他の四人は彼を見逃したのである。ヤシャルはびっくりした、何故なら上から見知らぬ黒いフードを被つた人が彼女のグラスに毒があると示唆したのである。

「御主、何者じゃ」

他の人々は騒然とした。ダークエルフは武器を構え、ユライは彼女を守ろうとした。その人物は突然棒みたいなものでコライを吹き飛ばした。

「おい、衛兵。俺を雇つた奴らがまだ上にいるぞ」

ダークエルフたちは弓を構え、一斉に天井に攻撃した。すると、五人のフードを被つた人物たちが降りてきた。一人は死んでおり、他の奴らは怪我を負つたらしい。コライはナイフを投げた人物を睨みながら、叫んだ。

「殺せ、賊だ。こいつは神聖なる式典を邪魔した。姫様を狙つている、しかも私に罪を着せようとする。この飲み物に毒が入つてているなどという」

その人物は笑つた。この四方八方囮まれた状況で笑つたのである。

「おまえ、今自分が犯人ですつて言つたようなものだぞ。俺は別にお前に罪なんて着せようとは思つてもいなかつたけどな」

「コライ？ 御主、何故」

すると温和みたいな顔が激変した。ヤシヤルに向けた顔が憎悪でしかなく、恩義があるなどこれっぽちもない顔だつた。

「何故だと。貴様ら王族がいたから、我々一族は一生お前たちに使えなければならなかつたんだぞ。せつかく先王を毒殺し、亡き女王を事故に転落死にしたのに、ここで計画が終わるとでも言つのか。ふざけるな。せつかくお前のよつなクズを暗殺者として雇つたのに、計画が失敗だ」

すると、またしても男は笑つた。高らかに笑い出した。

「悪いが、俺は頭はいいほうでね。いきなり人殺していくさといつと言つて殺せるほどバカじやないさ。なんで殺すかの理由もちゃんと調べたんだぜ」

ダークエルフのじつい体をしていて、いかにも歴戦の戦士ですといつた衛兵が近づいて、聞いた。

「お前は暗殺者なのか、それとも単なるフリーの殺し屋なのか」男はさつとマントを脱いだ。そこには少年が立つていた。自分の背よりも長い金棒を持ち、ベヒーテルを着ていた。

「悪いが、俺は暗殺者と殺し屋の違いがわからん。だけどパンダとシマウマの違いだつたらわかるけどな」

と言つたと同時にコライを金棒で吹っ飛ばした。コライは壁にのめり込み、血を吐いた。

「貴様、計画を・・・よくも・・・ぐはつ・・・何故だ」

男はにんまりとした。

「俺は密かに殺すことが大嫌いなのさ」

他の四人が男に向かつて突進しようとしていた。

「よくも、計画を壊してくれたな。ここに捕まるぐらになら、貴様を殺してからだ」

「できるなら、やつてみな」

自信たっぷりに言うほど男は強かつた。金棒で全員を吹き飛ばしたのである。特に最初に突っ込んできた、太めの男には顔面を打つたほどである。

「歯ギヤ、歯ギヤ、ヴォレの歯ギヤ」

「おつと、俺の棒術は回転を加わらせる」と破壊力をさらに上げるのを言い忘れていた

覆面がとれた四人の顔はどうやら広場にいた人々にとつて顔見知りだったらしい。

「ヌレン、カジキ、マール、テンリ。お前たちだつたのか」

「おや、知り合いか。これは悪いことをした」

「ふん、こいつらは学園都市の男性サムライだ。まさか、お前たちが関わっていたとはな。打ち首だけではすまないぞ」

「おい、どうすんだよ」

「あれ、あいつがいない。ギミーがいない」

ダークエルフの長とも言える人物が四人を一瞬にして捕らえてしまつた。

「ギミーがいないんだって、ギミーが」

「誰だ、ギミーとは」

「さつき死んだはずのギミーがいない」

「逃げたのだろう。そんなことはどうでもいい、おい、お前、金棒使い。貴様も捕まえてやる」

男は笑みを浮かべながら、小馬鹿にしたようにダークエルフの長に言つた。

「できるものならね」

二人は空中で戦い始めた。ダークエルフの長は短剣を持ちながら、金棒を防ぐのに手が一杯だつた。金棒が彼の顔や腕など急所の部分を的確に狙つていた。彼は避けるのが精一杯で、攻撃などできずに防御に徹するしかなかつた。それに見かねたルイスは衛兵に矢で攻撃命令をだそうとした。ダークエルフの長はそれを止めた。

「やめる、こいつはサシで勝負しないと勝てない相手だ。矢を射れば、わしにも当る」

「ほう、さすがに強いだけあるな。だが、貴様は一つ忘れている。俺が卑怯者だということを」

ダークエルフの長がちょっと怯んだ隙に股間を狙い、体をひっくり返した。ダークエルフの長は股間を押さえながら言った。

「貴様、う、戦士の恥だぞ、げ、くー」

「俺は戦士じやない、たんなる殺人未遂を起こしそうになつたけどあえて起こそなかつた人物だ」

「ならば、我ら兄弟が御主に勝負を挑む」

「おお、新参か」

一人は白髪だが、ポニー・テールにしており、もう一人は短髪だつた。体はがつちりしており、盾と矛を持つていた。

「我はゲンブ、盾を極めたもの」

「我はスザク、矛を極めたもの」

男は精一杯の猫撫で声で言つた。

「おお～、怖いね～」

「そんなことが言えるのは今のうちだ。我盾は決して攻撃を通さない

「我矛はどんな盾をも貫く」

男はにやりとした。

「知ってるかい、こいつの言葉を、矛盾」

「何を言つてゐるのかわからないな」

スザクが突いた矛が男に当りそうになつたが、男は矛を後ろから来たゲンブの盾に当らせた。勢い良く盾に当り、ヒビを入れてしまつた。

「何をしているスザク。我最強の盾が」

「すまぬ、兄者」

兄が弟を叱つてゐる最中に男が回転を加えた金棒で盾が貫いてしまつたのだ。もの凄い音と同時にゲンブは盾と一緒に壁に吹つ飛んでしまつた。

「兄者ー」

「戦いにおいて、余所見をするなんて駄目だね」

地面にスザクを叩き付けた。金棒が彼の体を壊してゐるかのように骨の碎く音が聞こえてきた。

「ぐはっ、不覚だ」

ヤシャルはそんな戦いを見て、この男に興味を持つた。自分より歳はそれほどではないが、歴戦のダークエルフの戦士がこうも簡単に倒されるとは彼女も自分の従者として雇いたかつた。しかし、ユライの件もある。彼女はちらりと半死半生のユライを見た。先代王の仇でもあるユライをこの場で殺したかった。彼女は迷つた。

「御主、わしをこの場で殺そうと思うのか」

「ふふふ、その歳でもうそんなこと考えたら、あんまり良い事ないよ」

「あたしの妹は殺させない」

ヤシャルと男の間にクルミが割つて入つた。クルミは王族戦闘用の服を着ていた。服の色が白い色でどこにも他の色がなかつた。

「その服、リーシャンか」

「ほう、知つてゐるのね。そう、リーシャンよ。一応念のために着ていたけど、まさか勘が当るとは思わなかつたわ。ところで、あなた今の状況わかつてゐる」

男の周りにはいつのまにかほとんどの王族護衛の近衛兵が周りを固

めていた。皆それぞれ剣みたいな武器を持っていた。

「まあ、公開処刑みたいなものだる。でもよ、別にいいさ。自分がここで死んでも悔いはないが、お前本当に戦闘妖精ピクシーか。戦闘妖精ピクシーは戦闘には向きだと聞いたが」

クルミの周りに黒い感じのものが纏つっていた。生きているものが纏つているような感じではなかつた。クルミから百戦錬磨のような雰囲気が見えた。

「お前、呪われた子か、くそこんなやつが戦闘妖精ピクシーだと。ふざけんな」

彼女から発する言葉、呪われた子など男は彼女について知つているのかもしない。だんだんとあの余裕だつた男の表情が崩れていつた。男はクルミに何かを感じたようだつた。男は次第に壁に背を向けて、逃げるように足を徐々に後退した。

「逃げるぞ、雨月」

「ギミー？お前死んでなかつたのか」

「いひじうことに備えて、死ななかつたんだ。俺と共に逃げる。どうせここで捕らえられてもそここの馬鹿娘に仕えてしまつ。俺とともに来い」

いつの間にか、男のそばにギミーと呼ばれた男がいた。ギミーという男は仮面をかぶり、両手には刀と呼ばれるものを持つていた。

「お前を信じることができるか。俺をあんな所に閉じ込めといいて。俺は俺の力でここを切り抜ける。甘ちゃんには興味がねえよ。偽名のギミー君」

「ぐ、せつかく俺が助けてやろうと思つたのに。その態度はなんだ。結局お前は自分勝手だ。だが、そういうお前を買つてはいる。お前は俺のために時間を稼げばいい。ただ、それだけだ」

言い終わると同時に男に刀を突き刺した。一瞬であつたが、男はにやりと笑つた。

「頭がおかしくなつたか、雨月。俺のためにお前が死ぬ事で俺は逃げることができる」

「お前の裏切りなんてとっくに気付いていたよ。この瞬間を待っていた」

「刀が抜けない。貴様、俺はお前と違つて高貴な存在だということ
がわからないのか、くそ抜けろ」

刀が深く突き刺さつていたようで、男から血が体から溢れ出た。だが、ギミーは彼から逃げられないものである。

「いつなつたら父上に貴様の首を手みやげに今回の失態を見逃して
もらつまでだ」

「そんなことするまえに自分の危険を考えておくべきだつたな」
男は金棒でギミーの腹に穴を開けた。そこから銀色の血が滴り落ち
た。

「やっぱり銀色の血か。予想通りだな。お前、ヨーロッパ族だ。
獣人で貴族口調しかもさつきできた穴がこうも簡単に修復され
く。となると、あの一族ということになるな」

「お前の仕打ちは許さない。今度会つたら殺させてもらひつ。あばよ」
ギミーは煙玉のようなもので姿を消した。

「出入り口を塞げ。絶対に逃がすな」

「無駄だと思うよ。あいつは逃げることにしか脳のない一族だ。さ
て、じいや呪われた子よ。俺はこの怒りをお前にぶつけたい
「死んでも知らないわよ」

クルミはさつきよりも遙かに怒ったように言った。目がつり上がり、
氣品のとれるような顔ではなかつた。クルミの一瞬の一撃で男は倒
れた。その一撃で火花が飛び散つたようだつた。男は刀の傷もあつ
たが体が熱かつた、この熱さは普通の常人は死亡するほどの熱さだ
つた。

「この男、コロオー病に煩つている。よく、この状態で生きていた
な」

「どうします。この男」

「色々質問したいが、まずは治療だ。ゲンブ、スザク、医療班に手
配しろ」

「は、セイリュウ様

ダークエルフたちはさつきの傷をものとしない感じだった。

招かれたの密（後書き）

悪いです・すいません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5755m/>

どこにでもあって、どこにでも無い話

2010年10月10日19時51分発行